精製ツベルクリンπによる非定型抗酸菌感染の診断に関する研究 (人型結核菌と非定型抗酸菌の交叉反応を考慮して)

(その1) 動物実験およびッ反応陰性集団における成績

大 谷 元 彦

名古屋大学医学部予防医学教室(指導 岡田 博教授)

受付 昭和 42 年 5 月 2 日

STUDIES ON THE CRITERIA TO DETECT THE INFECTION OF UNCLASSIFIED MYCOBACTERIA BY SKIN TEST*

Motohiko OOTANI

(Received for publication May 2, 1967)

The problems of infection of unclassified mycobacteria have been discussed not only from the bacteriological but also from the clinical points of view. About 150 cases have been confirmed as unclassified mycobacteriosis in the last decade by Prof. Hibino, and a number of persons infected with unclassified mycobacteria has been estimated by the Research Committee on Epidemiology of Unclassified Mycobacteriosis (chairman: Prof. Okada). As a tuberculin skin reaction is the most useful method to detect the infection of tubercle bacilli because of its specificity and simplicity, it was considered that skin tests using tuberculin produced from various kinds of unclassified mycobacteria may be applicable to detect the infection of unclassified mycobacteria. However, as the prevalence of tuberculosis infection is still very high among adult population and BCG vaccination has been conducted extensively among younger generation in Japan, cross reactions to unclassified mycobacterial antigens among those infected with tubercle bacilli or BCG vaccinated must be taken into consideration.

The purpose of this study is to analyze quantitatively specific and nonspecific reactions to various mycobacterial antigens in experimental animals and men, and to establish the criteria to detect the infection of unclassified mycobacteria by skin tests.

Groups of guinea pigs were inoculated either with Mycobacterium tuberculosis or unclassified mycobacteria of the four different type (photochromogens, schotochromogens, non-photochromogens and rapid growers). Skin reactions to homologous and heterogous antigens were compared. A series of comparative intradermal skin test were carried out on 26,682 persons using tuberculin produced from tubercle bacilli and 4 kinds of unclassified mycobacteria.

In guinea pigs, the average size of reactions to homologous antigens was always bigger than that to heterogous antigens, but the strength of the reaction to heterogous antigens, was markedly different by animals.

Among negative reactors to $H_{37}Rv$ π , the frequency distribution of diameter of erythema to unclassified mycobacteria was expressed by the exponential distribution in all the age groups, and based on this fact, the upper limit of non-specific reaction to unclassified mycobacterial π

^{*} From the Department of Preventive Medicine, School of Medicine, Nagoya University, Tsurumai-cho, Showa-ku, Nagoya-shi, Japan.

was calculated theoretically, and the following criteria was established:

erythema less than 5 mm in diameter....negative

erythema 5 to 9 mm in diameterpositive doubtful

erythema 10 mm or over in diameterpositive

Among those infected with tubercle bacilli, the reaction to unclassified mycobacterial π was smaller than that to $H_{37}Rv$ π , but the former was often larger than 10 mm in diameter. As thefrequency distribution of cross reactions to unclassified mycobacteria π by the size of reaction to $H_{37}Rv$ π fit to normal distribution, the upper limit of cross reaction was determined by calculating " $M+3\sigma$ " point in each size of reaction to $H_{37}Rv$ π , and the statistical analysis was made. Regression of " $M+3\sigma$ " points to each size of reaction to $H_{37}Rv$ π fit with a cubic regression curve by using methods of least squares, and it was proved by a test of significance that these cubic regression curves could be replaced by regression lines. As the distribution of " $M+3\sigma$ " points in each group was expressed by normal distribution, a zone of " $M+3\sigma$ " points was calculated. As shown in Figures 12 to 14, a larger reaction out of zone was considered as positive, a reaction within a zone was considered as positive doubtful, and a smaller reaction out of zone as negative.

In conclusion, criteria were established to detect the infection of unclassified mycobacteria, and by applying the criteria to the clinical cases and epidemiological investigations, satisfactory results were obtained.

I 緒 言

人型および牛型結核菌以外に人体に病原性を有する抗 酸菌が存在することは早くから推定されていたが、はな はだまれな事象としてあまり注目を集めていなかつた。 1951 年 Timpe and Runyon¹⁾, Buhler and Pollak²⁾ら は、いままで非病原性と考えられていた未分類の抗酸菌 によると考えられる症例を報告した。その後かかる症 例が少なからず存在していることが分かり, 1957年 Crow³⁾ は系統的にこれらをまとめ臨床的観察を発表し たが、本症が 1959 年第 15 回国際結核病学会の中心課 題の一つとして取り上げられるにいたつて,本症の存在 は一躍世界の関心を集めるにいたつた。わが国において も戦前よりかかる抗酸菌が人体から分離されており, こ れらの抗酸菌によると考えられる髄膜炎や膿瘍の報告が あつた4)。1952 年染谷らは最初の肺非定型抗酸菌症(Ⅱ 群 Scotochromogens) を発表したが、以来散発的に症 例報告があつた。1959 年来岡田らを中心とする非定型 抗酸菌感染の疫学研究班の活動や,戸田らによる抗酸菌 分類研究班の研究を中心に漸次関心が高まり,1966 年 末までに約150例の症例が名大日比野らにより認定され るにいたり、年々増加の傾向がみられている。

本症は臨床像が肺結核症にきわめて類似し,かつ菌の 抗結核剤に対する感受性も低く,したがつて化学療法の 効果も期待しにくく臨床的にも問題となる疾患である。

一方本菌による感染の問題として 1924 年すでに Ha-

stings⁶⁾⁷⁾ は無病巣家畜牛の疫学的研究から、人型およ び牛型結核菌以外の抗酸菌感染がかなり広範に存在する ことを推定しており、その後 Meyer®, Crowford®)10), Hagen¹¹⁾, Seibert¹²⁾らの動物実験により,人型・牛型結 核菌と鳥型あるいは非病原性とも考えられていた抗酸菌 の間に共通抗原が存在し、高濃度ツベルクリン液(以下 ツベルクリン液はツと表わす)による結核診断のさいに はこの点を十分考慮せねばならぬことが指摘されてい た。 Palmer¹³⁾¹⁴⁾, Edward¹⁵⁾¹⁶⁾ らは第二次大戦後数年 間にわたつて実施した看護学校生徒を中心とする高濃度 ツ液を用いた疫学的調査によつて, 米国東南部では弱陽 性者が多く、人型菌感染の特異的な2峰性分布を示さ ず, いわゆる low sensitivity と呼ばれる現象がある ことを観察した。これは人型菌以外の抗酸菌による感染 が高率に存在するためとかれらは考えたが、Nyboe¹⁸⁾も 世界各地の 33 カ国の小学生について低濃度および高濃 度ツ液による調査から、熱帯および亜熱帯地方で同様の 人型結核菌(以下人型菌)と異なる菌の感染が相当高率 に存在することを推定している。これらの菌はすでに 1935 年 Pinner¹⁹⁾により atypical acid-fast bacilli 非 定型抗酸菌(以下非定型菌)と命名されていた。Palmer, Edwards^{18)~16)} らはその後非定型菌症から分離された菌 から精製したツ液, すなわち非定型菌 Nonphotochromogens (以下 Nonphoto.) Battey 株より作製した PPD-B と人型菌由来の精製ッ PPD-S を用いて海軍徴 募兵 26,496 名を調査し、米国東南部の出身者は PPD-B に高い陽性率を呈していたと報告し、その他にも同様な報告が相ついでみられている²⁰⁾²¹⁾。また Photochromogens (以下 Photo.) Bostrum 株より PPD-Y, Scotochromogens (以下 Scoto.) Gaus 株および Bridge 236 株より PPD-Scoto., 患者から分離した Rapid Growers より PPD-F 等の非定型菌ツ液が作製され、こうしたツ液を使用した野外調査が行なわれ、本菌による感染状況が各地で報告されるようになつた^{22)~24)}。わが国の非定型菌感染の研究は 1959 年にすでに岡田²⁵⁾らによつて Edwards より提供された PPD-S, PPD-Y, PPD-B を用い結核患者、小学生、健康成人を対象に行なわれており、交叉反応のため確実なことはいえないが、感染者の存在が推定された。

本症の臨床診断は 1962 年日比野により発表された criteria によりなされているが、本基準により定型的に 本症と診断された症例は 1965 年末までに全国で 100 余例という少数であり、本症の感染、発病等の全貌を伺い 知るためには集団の感染状況についての疫学的調査が必要である。一方すでに 1960 年非定型抗酸菌感染の疫学的研究委員会(班長岡田博)²⁶⁾⁻³²⁾が組織され、ついで結核症類似疾患の疫学と臨床研究委員会(班長岡田博)に 引きつがれ、本邦で分離された非定型菌より作製したツ液による調査が行なわれて、case finding とともに感染を基礎として本症の疫学像を追求しようとしている。

抗酸菌感染を知るには結核菌と同様各種非定型菌から 精製されたツによる皮膚反応が用いられるが、これは手 技が簡単であり、広く実施できるので好都合である。さ らに Edwards⁴⁷⁾, Magnusson³⁷⁾, Takeya⁵⁰⁾, 岡田²⁶⁾ ら により報告されたように、抗酸菌未感染者および動物実 験から皮膚反応は、感染菌と同種の抗原に特異的な反応 を示し、異種抗原にはより弱い反応を示すので、人型菌 ツと非定型菌ツを同時に注射し, 両者を比較することに より非定型菌感染の診断に十分利用しうることが証明さ れている。しかしわが国においては人型菌感染がなお高 率であり、また未感染者に BCG が高率に接種されてい るので、人型菌感染者、BCG 接種者には人型菌ツに対 すると同時に, 非定型菌にも抗酸菌間の共通抗原による 交叉反応を示す者がはなはだ多いため、判定はそれほど 容易とはいえない。著者はこの点にかんがみ各種抗酸菌 感染時における同種および異種ツ反応について考察し、 その特異反応、非特異反応および交叉反応について推計 学的に検討して非定型菌感染の判定基準を設定するため の参考資料にしようと試みた。

II研究方法

1. 動物実験における皮膚反応

各種抗酸菌感作時の皮膚反応の発現様相について観察 した。300g 前後の白色雄モルモットを 1~2 週間観察 した後人型ッ反応陰性であることを確かめ実験対象とした。感作菌株はグループI(以下I群と略す)Photochromogens P_{16} 株、I群 Scotochromogens 石井株、三池株、I群 Nonphotochromogens 蒲生株および人型菌 $H_{37}Rv$ 株を用い、対照として無感作群を用いた。上記の菌で流パラ包理加熱死菌 $10\,\mathrm{mg/ml}$ 含有菌液 $0.2\,\mathrm{ml}$ を作製し、人型菌あるいは非定型菌の一種を感作し、皮膚反応を感作後 4、8 週後に実施した。皮膚反応の抗原は九大武谷教授により各種抗酸菌について作製された精製ッπを用いた。抗原は $0.1\,\mathrm{ml}$ 当り $1.5\,\mathrm{mcg}$ (OT 200倍相当)を用い、注射部位はモルモットの背部を選んで注射し 24 時間後に硬結を計測し、同種および異種抗原による皮膚反応の発現状況を比較検討した。

2. 人間集団における皮膚反応

同一人の左右両腕の初回部位と思われる局所 を選ん で, 人型菌πおよび非定型菌π (P₁₆π, 石井π, 蒲生 π, 佐藤πのうち一種類) を同時に注射した。原則とし て左右差を考慮して一人ごとに左右交互にかえて実施し た。注射量は 0.15 mcg/0.1 ml(OT 2,000 倍相当)であ る。判定は 48 時間後に行ない発赤および硬結を計測し た。人型菌ツの反応 5 mm 以下の者を人型菌ツ陰性者群 とし、このグループについて非定型菌πの皮膚反応の分 析から非特異反応の限界を知ることにした。対象は発赤 5 mm 以下の中学生 759 名,成人 380 名を選んだ。また 人型菌 ツ陽性者集団としては、中学生 11 集団 10,870 名, 高校生 11 集団 7,667 名, 自衛隊 6 集団 4,096 名, 一般住民 5 集団 838 名, 結核患者 7 集団 2,572 名を選び 人型菌πの反応を基準として非定型菌πの反応状況を検 討した。なおこのうち高校、自衛隊および結核患者集団 の一部は結核症類似疾患の疫学と臨床班での資料を用い た。

III 研究結果

1. 動物実験における皮膚反応

表 1 は死菌感作後の同種および異種抗原の反応を示したものである。反応の平均値を比較すると,同種抗原の反応は常に異種抗原の反応より大きい反応を示し特異性がみられた。すなわち人型菌感染群では同種抗原の反応を 100 と する と I 群 P_{16} 86.9, II 群 石 井 48.5,三池75.4, II 群 浦生 80.6 で, P_{16} π , 浦生 π にかなり強い交叉反応を示している。三池 π は P_{16} π , 浦生 π に次ぐ交叉反応を示しているが,同じ II 群でも石 井 π による反応は弱く,II 群には交叉反応の強いもの,弱いものがみられている。非定型菌 P_{16} 感作群は人型菌 π に 95.5 と同種抗原に近い反応を示すが,他の非定型 π には石 井 π 47.7,三池 π 59.0, 蒲生 π 67.6 の反応を示した。 石 井 感作群では人型 π ,非定型 π に 34.6~57.7 と比較的小さい交叉反応を示し,同じ Π 群の三池 π には 53.8 の反応を示

Gamou

Control

Guinea pigs sensitized with	Number of animals	Purified protein prepared from						
			H ₃ -Rv	Pie	Ishii	Miike	Gamou	
${ m H_{37}Rv}$	9	Mean	17. 5	15.2	8.5	13. 2	14.1	
		Range	$15 \sim 20$	13.5~17.0	6~10.5	11~15	10~17	
		%	(100)	(86.9)	(48.5)	(75.4)	(80.6)	
P ₁₆	8	Mean	17.0	17.8	8.5	10.5	11.5	
		Range	15~19	16~20	6~11	9~12	9~12.5	
		%	(95.5)	(100)	(47.7)	(59.0)	(67.6)	
Ishii	7	Mean	4.5	4.5	13.0	7.0	7.5	
		Range	4~5.5	3~6	10~15	6.5~8.0	5~9.5	
		%	(34.6)	(34.6)	(100)	(53.8)	(57.7)	
Miike	8	Mean	14.2	10.5	8.6	14.9	6.0	
		Range	11~14	8~11.5	6~12	11~16.5	5~8	
		%	(95.3)	(70.5)	(57.7)	(100)	(45.5)	

7.8

 $6 \sim 9.5$

(50.3)

3.2

 $3 \sim 4$

11.2

 $9 \sim 13$

(72.2)

3.3

3~4

Table 1. Skin Reactions to 1.5 mcg of Homologous and Heterogous Antigens in Guinea Pigs Sensitized by 2 mg of M. Tuberculosis or Various Strains of Unclassified Mycobacteria

Mean

Range

%

Mean

Range

7

5

14.5

13~16

(93.5)

4.5

4~5

す。三池感作群では人型 π にかなり大きく反応し、 P_{16} π に 70.5,石井 π に 57.7,蒲生 π に 45.5 の反応を示し同じ Π 群の石井 π より大きい反応を P_{16} π に示した。蒲生感作群は人型 π に 93.5 と大きく反応し他の非定型 π には P_{16} π 50.3,石井 π 72.2,三池 π 68.2 の反応を示すが,石井 π の交叉反応が比較的大きくなつていることが注目される。なお対照の無感作群はいずれも 3~5 mm の反応であり,非特異的なものと考えられた。個々の動物の硬結値は平均値よりかなりのバラッキを示しており,同種抗原の反応が異種抗原と同じかあるいは若干小さい反応を示すものもあり,一方異種抗原にほとんど反応しない群もあり,交叉反応は必ずしも一定した大きさで現われてはいなかつた。

以上動物実験の結果を要約すると抗酸菌感作モルモットは同種抗原には異種抗原より大きい反応を示し、同種抗原に特異性がみられる。しかし非定型菌感作時には石井感作群を除き人型菌πに 90 以上の比較的大きい交叉反応を示し、また蒲生感作時には石井πにも比較的大きな反応を示している。また個々の動物でみると交叉反応はかなりのパラツキを示していた。

2. 人間集団における皮膚反応

1) 人型菌ッ反応陰性者群の皮膚反応

人型菌ッ反応 5 mm 以下すなわち人型結核菌未感染と 考えられる者の非定型菌ッの反応状況を発赤度数分布に

Fig. 1. Observed Frequency Distributions of Skin Reactions to 0.15 mcg of $P_{16}\pi$, Ishii π and Gamou π in Junior High School Pupils whose Reactions to 0.15 σ of $H_{37}Rv$ π were Measured Less than 5 millimeters

10.6

8.5~12

(68.2)

3.4

3~4

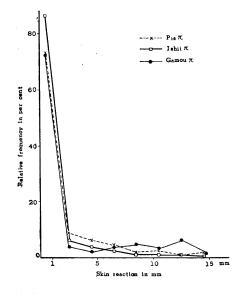
15. **5**

 $14 \sim 17$

(100)

3.2

3~5



より観察した。図1は中学生の $P_{16}\pi$,石井 π ,藩生 π に対する発赤値の頻度を示したもので横軸は非定型 π の反応の大きさ、縦軸はその度数を頻度により示したもの

^{*} The bold type figures indicates the homologous reaction.

である。P₁₆ π では反応が 0~1 mm の者は 73.8% と 高く, 2~3 mm は 8.7% に減少し以後 4~5 mm 6.4 %, 6~7 mm 4.6%, 8~9 mm 1.8% と次第に減少して いる。また 10~11 mm 2.3%, 12~13 mm 0.5%, 14~ 15 mm 1.8% と 10~15 mm の反応を示す者もある。石 井 π では $0\sim1$ mm 86.6%, $2\sim3$ mm 6.0%, $4\sim5$ mm 3.8%, 6~7 mm 2.8%, さらに 8~9 mm 0.6%, 10~ 11 mm 0.3%, 14~15 mm 0.3% といずれも 1% 以下 となり P_{16} π とほぼ等しく減少を示している。蒲生 π では 0~1 mm 72.4%, 2~3 mm 4.0%, 4~5 mm 2.7 %, $6\sim7 \text{ mm } 4.0\%$, $8\sim9 \text{ mm } 4.9\%$, $10\sim11 \text{ mm } 3.1$ %, $12\sim13 \,\mathrm{mm}$ 6.3%, $14\sim15 \,\mathrm{mm}$ 1.8% °C, P_{16} π , 石井πより6~15 mm の者が多い。これらの分布はほぼ 指数分布と推定されるので P16, 石井, 蒲生各πの反応 の実測値から計算される指数分布の理論曲線を求め、実 測値の曲線と比較すると 0~3 mm 以下の者は両者の頻 度は一致するが、4~7 mm の者は実測値の頻度が少な く8mm 以上の者は逆に実測値が予測値よりも多くなつ ている。推計学的に実測曲線と理論曲線とは1%以下の 危険率で有意差が存在し、実測値は指数分布曲線とみな すことができなかつた。これはなんらかの要因により実 測者中に8mm 以上の反応を示すものが多いためと推定 される。しかし人における非特異の皮膚反応が指数分布 に近い反応を示すことが野辺地、前田らによつて示され ており、指数分布曲線から集団の 95%, 99% の者が含 まれる上限点の反応の大きさを求めてみると、 P_{16} π で は 7 mm, 11 mm, 石井 π 5 mm, 7 mm, 蒲生 π 9 mm, 15 mm となる。 すなわちこれ らの 発赤値以下の大きさ の反応は 95%, 99% の確かさで非特異反応と考えられ る者の範囲を示している。同様に人型菌ツ陰性の成人の 非定型菌πの反応状況を発赤度数分布により示すと図2 のごとくになる。 P_{16} π , 石井 π , 蒲生 π および佐藤 π では 0~1 mm の反応を示す者は最も多く P₁₆π, 佐藤 πは 70% 以上で, 石井πでの 58%, 蒲生πの 48% に 比し高率となつている。 $2\sim5\,\mathrm{mm}$ の頻度は石井 π , 蒲 生 π では P_{16} π , 佐藤 π より高い。 $6\sim15\,\mathrm{mm}$ の反応は 蒲生πが 8~9 mm, 石井πが 12~13 mm で若干頻度が 高くなるが、ほぼ発赤径の増加とともに頻度は少なくな り, いわゆる指数分布に近い曲線を示す。佐藤πでは全 員 $11 \, \mathrm{mm}$ 以下であるが P_{16} , 石井, 蒲生各 π では $12\sim$ 15 mm の反応を示すものもある。これらの実測値から 指数分布による理論曲線を求め、実測値との差異を発赤 径 $0\sim3$ mm, $4\sim7$ mm, $8\sim15$ mm のおのおのの頻度を 比較することにより求めると、5%以下の危険率でみて も有意差なく、成人の反応は指数分布を示しているとみ なすことができる。指数分布曲線より成人で 95%, 99% の者が含まれる上限点を求めると P_{16} π で 7 mm と 11mm, 石井π9mmと11mm, 蒲生π11mmと15mm,

Fig. 2. Observed Frequency Distributions of Skin Reactions to 0.15 mcg of P_{16} π , Ishii π , Gamou π and Satou π in Healthy Adults whose Reactions to 0.15 mcg of $H_{37}Rv$ π were Measured

Less than 5 millimeters

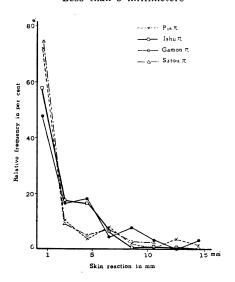


Table 2. 95 and 99 Per Cent Points of Cumulative Frequency Curve for the Junior High School Students and Healthy Adults whose Skin Reactions to 0.15 mcg of $\rm H_{37}Rv~\pi$ were Measured Less than 5 millimeters

A 4:	Junior hi		Healthy adults		
Antigen	95% points	99% points	95% points	99% points	
$P_{16} \pi$	7 mm	11 mm	7 mm	11 mm	
Ishii π	5	7	9	13	
Gamou π	9	15	11	15	
Satou π	_	-	7	11	

佐藤 π 7 mm と 11 mm となる。以上の結果, 中学生, 成人の人型菌未感染群における 95% および 99% の者 が含まれる上限値は表2のごとくになる。 すなわち中学 生では非定型πの 95% 上限値は 5~9 mm, 99% 上限 値は 7~15 mm となり、成人では 95% 上限値 7~11 mm, 99% 上限値は 11~15 mm となる。成人の上限値 は中学生より若干大きく, また蒲生πは他の非定型菌π より大きい傾向を示す。しかしこれらの上限値は人型菌 ツ反応陰性者より求めたものであり, この群の中には非 定型菌感染者も少数含まれているかもしれないので、非 定型菌未感染者のみでの非特異反応の上限値は上記の上 限値より若干小さいとも考えられる。また野辺地51),前 田33)らにより人型菌ツの陰性者の非特異反応の上限値は 5~9 mm にあるとみなされており, こうした点を考え あわせると非定型菌πの非特異反応の上限値は, 人型菌 πの上限値と同様に設定しても問題はないと 考え られ

る。したがつて人型菌未感染者における非定型菌感染の ~9 mm 疑陽性, 10 mm 以上陽性と考えてよいと思わ 判定基準としては非定型菌πの反応 4mm 以下陰性, 5 れる。